

自分にできること

三重県 志摩市立大王中学校 2年

竹村 真那 (たけむら まな)

「おなごはやぐらへ上がるもんじゃない。」
これは、私に向けて発せられた言葉です。

毎年、夏になると盆踊りがあります。私は小さい時から祖父母が住む地区の盆踊りに行っていました。そこでは、私の父や兄、従兄弟たちが太鼓や音頭を取っています。私もやってみたくて、やぐらに上がってみたいと思っていました。従兄弟や兄が太鼓をたたけるようになった年、私も一緒に上がらせてもらえました。太鼓はたたけなかったけれど、音頭がとりやすいように「はやし」を大きな声で言っていました。子どもたちの出番が終わりやぐらから降りた時、あるおばあさんが、私の所へやってきて、冒頭の言葉を言いました。「おなごはやぐらへ上がるもんじゃない。」私はその時、小さかったけれど、小さかった私にもわかるくらいきつい言葉でした。盆踊りが大好きで「はやし」も大きな声で頑張っていたのに、そんなことを言われるとは思いませんでした。悲しいやら、びっくりやらで泣いてしまいました。その時は、何も考えられなかったけど、その後「何で、男の子は上がってもいいのに女の子はいけないの?」「男の子と女の子と何が違うの?」と頭の中をぐるぐると回り続ける疑問に苦しみました。それから、夏がくるたびに、盆踊りへ行くたびに、そのことを思い出し苦しかったです。少し大きくなって、父に「音頭か太鼓かどっちかやる?」と聞かれたけどやりませんでした。やる気も起きませんでした。女の私がやってもいいのか、また何か言われるんじゃないか、という恐怖があったからです。あのおばあさんに言われた一言はたった一言だったけど私にはすごく重い一言になっていたのです。

しかし、去年の中学一年生の盆。私はそのやぐらで太鼓を叩きました。私がないぜ、前向きになれたのか。一番は、そのことを知った地区の人たちの「そんな事言われたんか。今度そんなこと言ったら、言ったるで、やりたかったらやればいい。」という力強い言葉でした。時間はかかったけれど、「女だからやれない。」という考えは「おかしい。」と、こんなにもたくさんの人が言ってくれた事に、勇気づけられたのだと思います。そして、盆踊りの太鼓デビューを果たせました。やっぱり初めは緊張したけど、だんだん太鼓の音が心地よくなりました。でも、やぐらから降りる時「何か言われるんじゃないか。」と心配しながら降りました。何も言われませんでした。「女でも、太鼓をたたいてもいい。」そう受け取りました。

そして今年、中学二年生の盆。今度は、音頭とりに挑戦しました。やぐらに上

ったとき周りからどよめきが起こりました。やはり、「女が音頭をとる」ということは、かなり異例のことなのだと感じました。さらに、音頭のマイクを持った時に、自治会長さんから名前と年を聞かれました。兄が音頭とりデビューの時には、なかったことだったのでおどろきましたが、名前と年をきかれるということは、「地区のみなさんに紹介され、歓迎されている。」ということだと思って少し安心しました。そして、音頭の出番が終わって、やぐらから降りた時に、あるおじさんに「女の人音頭ととるの初めて見た。」と言われてほめてもらいました。昔、女の人音頭をとっていたこともあったそうだけど、知らない人がたくさんいるそうです。なので、私がやぐらに立ち、短い間だったけど音頭をとったということは、意味のあることだったのだと思います。

「おなごはやぐらに上がるもんじゃない。」その人にとっては、昔からの習慣・伝統を私に親切に教えてくれた、何でもない一言だったかもしれませんが、でも、そんな何気ない一言でも「男だから、女だから、できる事とできない事がある。」という考え方では、納得できず、傷つく人がいるということはこのことから学びました。

私は、言われてから立ち直るまでにすごい時間がかかりました。でも、今では「男だから女だから、できることがある、できないことがある。」という考えは関係ないと思うことができるようになりました。そう決めつけているのは自分の心一つです。その考え方からみんなが抜け出せたなら、色々な場所でこのような苦しみは生まれないと思います。私の他にも同じようなことになった人がいるかもしれません。でも、昔とは違います。「いい昔」は引き継げばいいと思います。「悪い昔」には、みんなで「違うね」と言えるこれからであって欲しいと思います。私はあきらめなければ変えていけることもあるのだと思うから、これからも太鼓や音頭とりを続けていきたいです。